

# ズクノ山第2遺跡（D地区）

県営ふるさと農道緊急整備事業鹿村野  
地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

調査区遠景（南から）



出土押型文土器



## 例　　言

1. 本書は、平成10年度に実施された県営ふるさと農道緊急整備事業鹿村野地区に伴う 埋蔵文化財発掘調査の調査結果を報告するものである。
2. 本位右の現地調査ならびに室内調査は、宮崎県中部農林振興局からの受託事業により 田野町教育委員会が実施した。調査体制は下記のとおりである。

調査主体 宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

調査組織

田野町教育委員会 教育長 堀 内 錠

社会教育課長 永 谷 弘

社会教育課長補佐兼係長

川 口 博 文

同 主 任 森 田 浩 史 [調査・調整・事務担当]

同 主 事 金 丸 武 司 [調査担当]

3. 現地の作業員として、田野町内をはじめ清武町からも多数の参加をいただいた。

4. 室内調査の実施にあたり、下記の方々の補助を得た。

5. 本書の執筆は金丸が行った。

6. 本書で用いた方位は磁北、標高は海拔絶対高である。

7. 本書の色調表示は、農林水産技術会事務局監修の「標準土色帳」を参考にした。

8. 本書における遺構の表示には、下記の記号を用いた。

土坑（S C） ピット（S P）

9. 出土遺物は田野町教育委員会文化財調査事務局及び文化財収蔵庫に保管している。

## 本文目次

第Ⅰ章 序説 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 遺跡の位置と歴史的環境 .....	1
第Ⅱ章 調査の結果 .....	3
第1節 調査の概要 .....	3
第2節 層序 .....	3
第3節 検出遺構 .....	5
第4節 遺物（土器） .....	7
第5節 遺物（石器） .....	11
第Ⅲ章 まとめ .....	16

## 図版目次

第1図 町内主要遺跡分布図（北部） .....	2
第2図 調査区位置図 .....	2
第3図 遺構・遺物分布図 .....	4
第4図 土層断面実測図 .....	6
第5図 遺構実測図 .....	6
第6図 土器実測図 .....	8
第7図 土器実測図 .....	9
第8図 石器実測図 .....	12
第9図 石器実測図 .....	14

## 表目次

表1 土器観察表 .....	10
表2 石器観察表 .....	15

## 写真図版目次

卷頭 調査区遠景（南から） .....	23
卷頭 出土押型文土器 .....	23
図版1 調査状況（北から） .....	21
図版2 土層断面（東から） .....	21
図版3 S C - 0 1 検出状況 .....	22
図版4 S C - 0 2 検出状況 .....	22
図版5 S C - 0 3 検出状況 .....	23
図版6 S P - 0 1 検出状況 .....	23
図版7 出土早期土器（その1） .....	24
図版8 出土早期土器（その2） .....	25
図版9 出土石器 .....	26

# 第一章 序 説

## 第1節 調査に至る経緯

田野町は宮崎市の西方約20kmの地点を中心とする田野盆地と、その周囲を取り囲むように立地する台地、更にこの台地を籠にもつ山地からなり、1市（宮崎市）5町（清武町、高岡町、山之口町、三股町、北郷町）と接している。これまで大根や葉煙草などの農産業を主産業としていたが、近年工業団地の整備や専門学校の誘致、宅地開発などにより、次第に変化・発展しつつある。しかし、その一方で農業基盤整備事業や各種の開発事業に伴う埋蔵文化財の保存が大きな問題となっており、町教育委員会でも調整や調査体制の整備・充実を図っているが、これら開発事業に関わる遺跡の大部分は記録保存の対象となり消滅しているのが現状である。

これを受けて平成10年度に県営ふるさと農道緊急整備事業鹿村野地区が実施されることとなり、事業地内に県文化課が分布範囲を確認するため試掘調査を行なったところ、縄文時代早期の遺物が分布することが明らかになった。平成10年4月23日に中部農林振興局、県文化課、町農業整備課、町教育委員会の四者で協議し、設計施工上やむを得ず削平する部分について発掘調査を実施することとなり、平成10年5月12日付けで委託契約を締結、同年5月17日から現地の調査に着手した。調査の際は出野町、高岡町の皆様の御協力を得ながら、同年7月7日に終了した。実質調査面積は約630m<sup>2</sup>に至った。

## 第2節 遺跡の位置と歴史的環境

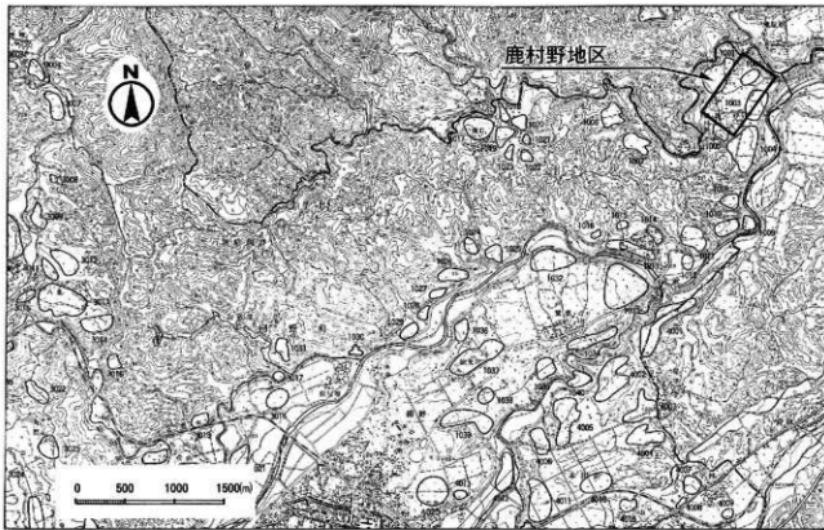
ズクノ山第2遺跡D地区は田野町の中心部から北北東へ約5km、宮崎市との町境に流れる黒北側と、清武町との町境を流れる清武川の合流地点に位置する鹿村野地区の台地上に立地する。台地は標高100~110mの平坦な地形であるが、遺跡周辺は調査区南側の丘陵地からなだらかに傾斜する地形を呈している。調査区の北部は黒北川によって刻まれた崖状の急傾斜になっており、その中腹には豊富な水量の湧水点も確認されている。

周辺には前年度調査が行なわれたズクノ山A~C地区があり、アカホヤ火山灰層の上面と下面に生活址が確認された。今年度はE地区でも調査が行なわれ、縄文時代早期の遺物・遺構が多数検出されている。同台地上ではほかに前原第2遺跡でも今年度調査が行なわれ、縄文時代早期の遺物が多量に出土している。なお、この調査区の隣接地からは、縄文時代前期と推定される玦状耳飾りも採集されている。一方、黒北川を隔てた対岸には、旧石器時代~縄文時代草創期、早期の遺跡として広く知られる椎屋形第1・第2遺跡も存在する。

### [参考文献]

「田野町内遺跡詳細分布調査」田野町文化財調査報告書第10集 田野町教育委員会 1990

「椎屋形第1遺跡・椎屋形第2遺跡・上の原遺跡」県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 宮崎市教育委員会 1996



第1図 町内主要遺跡分布図（北部）



第2図 調査区位置図

## 第Ⅱ章 調査の結果

### 第1節 調査の概要

調査は道路敷設部分のうち、県文化課による試掘調査により生活址の確認された部分の周辺に限定し実施した。調査面積は630m<sup>2</sup>である。なお、試掘調査時ではアカホヤ層上部において柱穴が確認されていたが、今回の調査ではこの面からは遺構、遺物共に確認されなかつた。また、調査区は北側の谷に向か大きく傾斜しており、堆積が深かつた一方で、南側では生活面が削平により消失していた。

### 第2節 層序（図4）

当遺跡では、以下のような土層が確認された。

I層：（表土・10YR 黒褐2/1）

軟質でさらさらした耕作土層である。全体に、II層にあたるアカホヤ火山灰層の小塊が少量混在している。

II層：（アカホヤ火山灰層・7,5YR 橙6/6）

火山ガラスを多く含む黄橙色の火山灰層である。黒色の軟質土と混入するためか色調がIII層よりくすむほか、表土と同様にさらさらしている。層下面は凹凸が激しいが、層上面は削平によるためほぼ直線状に切られている。

III層：（アカホヤ火山灰層・10YR 黄橙8/6）

II層と同じアカホヤ火山灰層であるが、固く締まっており、よりプライマリーな層といえる。水分、粘性はなく、火山ガラスを多く含んでいる。層上面は試掘時に柱穴等が確認されていたが、今回の調査ではそれらの遺構は検出されなかつた。

IV層：（アカホヤ火山灰層・10YR 黄橙8/6）

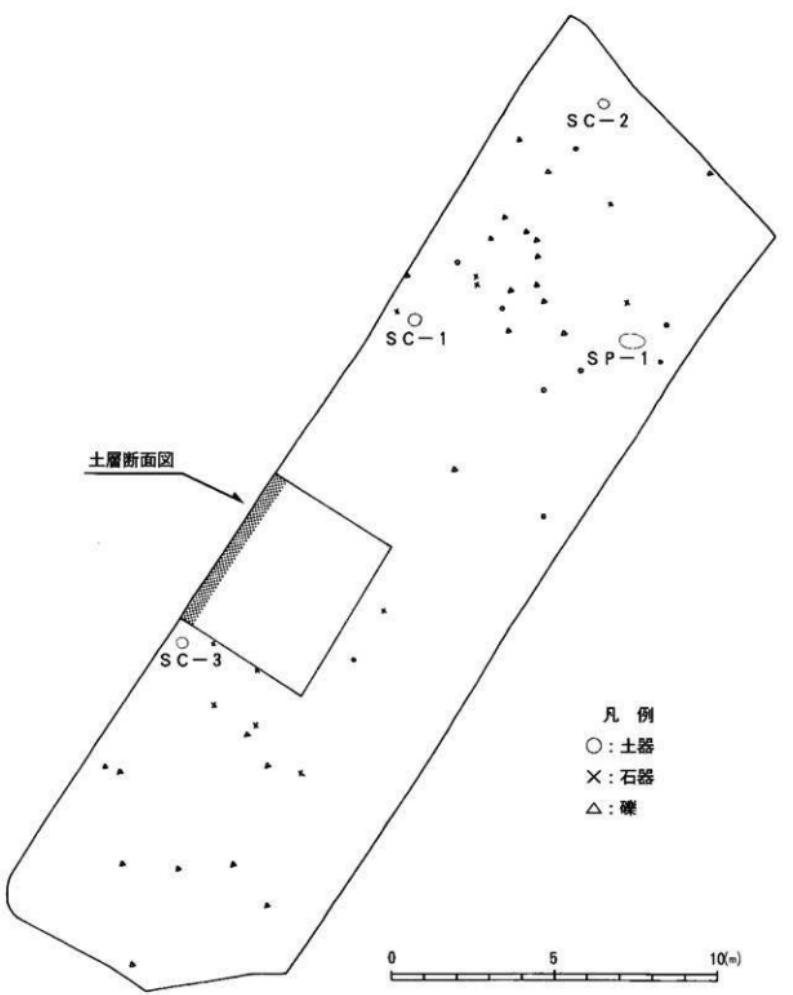
アカホヤ下面の層である。層中に1~3mmのスコリア片や、1~2mmの黒色粒子、また1mm以下の、II、III層よりも大粒のガラス質粒子を多く含み、それらが固まって堆積している。水分を含むが、粘性等は認められない。

V層：（牛の脛ローム層・10YR 暗褐3/4）

たいへん固く締まった層である。層中には、1mm以下の白色粒子が多量、1mm前後の軟質のオレンジ粒子が微量、1mm位の黒色粒子が微量含まれている。粘性があり、水分を少し含む。

VI層：（ローム層・10YR にぶい黄褐4/3）

層自体は固く締まっているが、V層ほどの固さはない。粘性に富み、水分を多く含んでいる。層上部には、V層から続く白色粒子、黒色粒子が少量認められるほか、南側の丘陵からの流れ込みによる小礫も混入する。調査区の出土遺物は全てこの層から出土した。



第3図 遺構・遺物分布図

#### VII層：（ローム層・10YR暗褐3／3）

固さ、粘性などはVI層と全く同じであるが、色調と、層中に白色粒子が多い点で判別が可能である。遺物は全く出土されなかった。調査区南側に部分的に堆積が確認された。

#### VIII層：（小林降下軽石層・10YRにぶい黄褐5／4）

固く締まった火山灰層。層中には1～2mmの白色粒子を多量、1～5mmのオレンジ色の軟質粒子、1mm前後の黒色粒子を少量含む。層はV層よりも更に固く締まっているが、水分、粘性は殆どなかった。

#### IX層：（ローム層・10YR黄褐5／6）

V層、VI層よりも粒子が粗く、軟質で粘性は殆どなく水分を多量に含んだ層である。層中には、調査区南西部に位置する丘陵の疊層と同様の小疊が少量ながら混入している。

### 第3節 検出遺構（図5）

調査により検出された遺構はピット1基、土坑3基である。

#### SC-01

長軸約50cm、短軸約40cmの不定形な円形の土坑であり、北西部にテラスを設ける。深さは約20cmである。覆土はスコリアや火山ガラスを多く含む火山灰層であり、II層に分別が可能である。色調や混入物に差異が認められるが、どちらも固く締まっており、粘性を全くもたない。遺構と包含層の切り合いは、他の土坑よりもプライマリーであり、早期以降に構築された可能性も考えられる。

#### SC-02

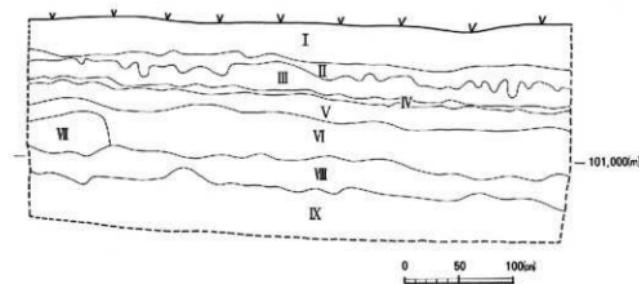
調査区の北部の傾斜面で検出された。長軸約40cm、短軸約30cmの円形に近い形状の土坑である。深さは約25cmであるが、底面は径10cm程であり、検出面から底面までほぼ一直線にロート状に落ち込む。覆土はII層に分けられるが、どちらも色調が暗く、スミ片を多く含んでいる。

#### SC-03

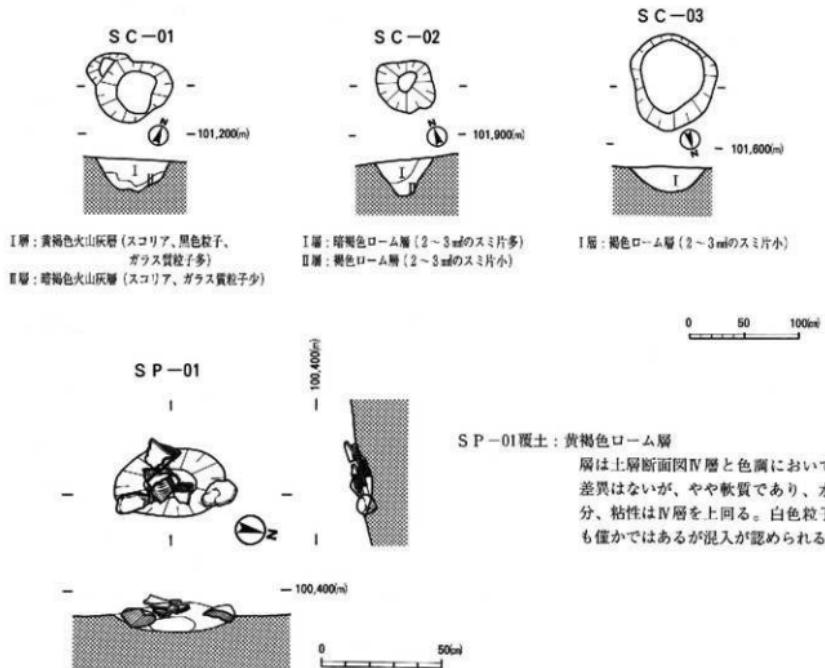
径60cm～55cmのほぼ円形の土坑である。土坑は最深部で15cm前後と浅く、また球状の断面形を呈す。覆土は固く締まっており、周囲よりやや暗い色調で、スミ片が混入しているなど、SC-02と検出状況が近似する。

#### SP-01

調査区北東部の、比較的傾斜の激しい面で検出された。長軸約50cm、短軸約30cmの長円形のピットであるが、深さはわずか10cm足らずである。長軸の両端には、約15×10cmの疊が2個配置される。疊の表面にはどちらも熱による赤変が確認された。疊の間には土器片が折り重なるようにして検出されたが、これらはすべて同一個体である。疊が覆土上面で確認された一方で、土器は遺構の上面から床面まで高密に入りこむ。遺構の覆土は、周囲のVI層と大きな変化はないが、軟質であり、粘性、水分を更に多く含む点に相違が認められる。



第4図 土層断面実測図



第5図 遺構実測図

#### 第4節 遺物（土器）図6、7

遺跡から出土した土器はその全てが遺物包含層であるIV層から出土した。このうち1～4は、S P-01内より出土し、その全てが同一個体である。また、調査区の表土層や調査区周辺からも遺物が確認された。

1～4はS P-01内出土の土器である。外面に山形押型文と撚糸文が併用して施文されている。それぞれの施文部は横位に並列するが、部分的に押型文の施文帯が一段落ち込み、撚糸文と交錯している。また、この部分の観察から、押型文が撚糸文に先行して施文されたことが判別できる。上位の押型文は口縁部にわずかに無文帯をもち、口縁部に平行し施文され、3～4列にわたり巡っている。また、下位の撚糸文は、横位に回転し施文しているが、上列の撚糸を2列目で逆さに施文しているためか、「く」の字に屈曲している。何度も重ねて施文しているためか、観察が明確でない。内面には外面と同様に山形押型文が施文されるが、原体条痕は認められない。口唇部は無文であり、ナデによる調整を行っている。器形は胴部から口縁部でわずかに外反し、胴部は殆ど直線気味ながら、僅かに膨らんでいる。

5は貼り付けに先行して条痕による調整を行い、楔状の突帯を貼り付たのち、突帯の周間に刺突を行った土器である。器面には貝殻腹縁による刺突文が深く刻まれる。また、内面は粗いナデが施される。焼成は良好であり、胎土には金色に変色した雲母片が少量混入する。文様から判断して、知覽式土器の口縁部付近と考えられる。

6も5と同様に楔状の突帯が貼り付けられているが、外面はナデが認められるのみであり、条痕や貝殻腹縁刺突は施文されない。貝殻文円筒系土器の一種と考えられる。

7は横位の山形押型文が施文されている。焼成は良好ではなく、そのため内面は欠損している。

8は外面に斜位の山形押型文の施文された胴部片である。厚手であり、内面には横方向のナデによる調整が行われる。

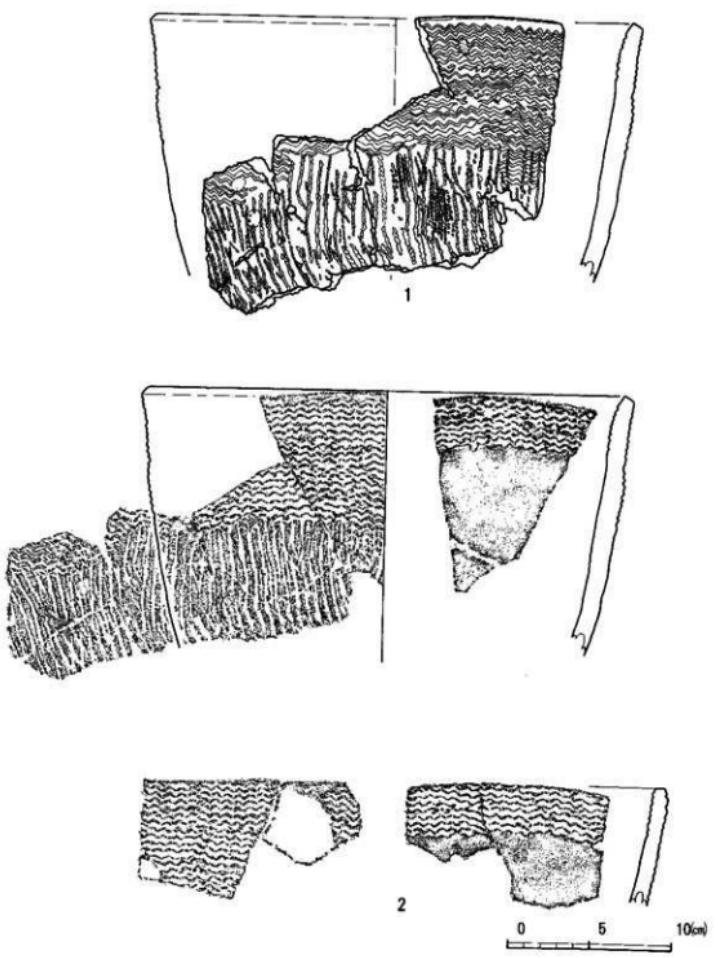
9は、外面の全面に貝殻腹縁による押引文が施される。焼成自体は良好であるが、器面には剥落が目立つ。胎土には長石、角閃石等他の土器に共通する混入物も認められるが、この土器においては石英も少量ながら混入される。下剥峰タイプの底部付近と考えられる。

10は貝殻腹縁刺突が連続的に施文された土器である。内面には縱方向の粗いナデが認められる。器壁はきわめて薄く、焼きは締まっている。南九州の貝殻文円筒系土器の範疇に含まれる土器の胴部片と考えられる。

11は外面に繩文が施文されているが、のちにナデによる調整が行われている。内面は風化のため観察が不可能である。

12は横位に綱目の隆帯を貼り付けたのちに棒状の工具により隆帯上に刻み目を施し、その後部に撚糸文を施文したものである。胎土は9と同じく、石英が混入している。内面のナデが粗い点に疑問が残るもの、平柄式の胴部上半と考えられる。

13～17は条痕文系の土器である。13の外面全面には斜方向の条痕文が斜位に施文される。内面は入念なナデ調整が行われる。器壁は他の条痕文系土器よりも薄い。断面は大きく傾くが、



第6図 土器実測図

これは胴部下半であるためと考えられる。14~16については、条痕の方向は異なるものの、器壁や器形、胎土に長石が多く含まれる点など、共通性が高い。ただ、色調や内面の調整の雰囲気が異なるため、同一個体とは認定しがたい。18も条痕文であり、条痕を比較的深く調整した点は13に近いと言える。また、外面には貝殻腹縁刺突が遺されているが、不規則に、しかもわずかに付けられたのみであり、文様として意図的に施文された可能性は低い。

## 第5節 遺物（石器）図8、9

石器は石鎌、尖頭状石器、石匙、スクレイパー、石斧、二次加工剥片、使用痕剥片、剥片、磨石が出土及び採集された。以下、器種別に説明を加えたい。

### 石鎌（18~23）

石鎌は表面採集も合わせて6点確認された。18は脚部の抉りが深く、丹念に仕上げられている。一方、19は抉りがほとんど入らず、基部作出を意図した剥離は一度のみである。尖端部には細かな調整が目立つ。20は脚部を欠損した大ぶりの石鎌である。若干左右対称形から外れるほか、剥離が全体的に大きく、また尖端部の調整が中途半端であることを考え合わせると、石鎌製作中に欠損し放棄された可能性も考えられる。21は尖端部のみである。裏面下部には素材剥片時の剥離面が遺される。刃部は表裏両面からの細かい剥離が集中し、鋸刃状になるように仕上た意図が窺える。22は尖端部と脚部が欠損している。基部の調整は粗く、抉りの頂点も石器の中心線から外れており、未製品もしくは失敗品とも考えられる。23は石器製作途上の未製品である。両面とも面的な大ぶりの剥離痕が目立ち、素材を成形する段階のものであったことを窺い知ることができる。

### 尖頭状石器（24）

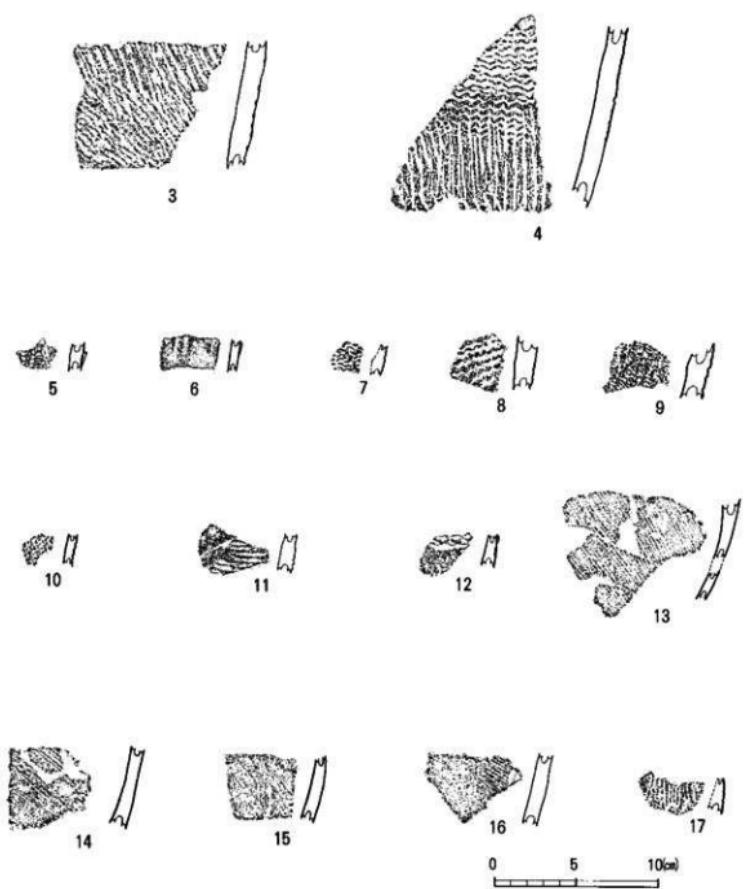
節理の多いチャートを素材とした、縄文時代早期に卓越する尖頭状石器である。裏面中央の剥離痕は素材時のものと考えられる。全体的に胴部の膨らんだ二等辺三角形状を呈す。調整は末端部と尖端部に比較的集中している。両縁辺部からも調整が行われるが、他の同器種の例に漏れず全体的に大まかな作りであり、断面を突レンズ状に仕上げようという意識も希薄である。

### 石匙（25）

横長の剥片の下端部を刃部とした石匙である。調整は突出部においては面的な剥離を連続的に行い、丁寧に作出されているものの、刃部は一転して粗い調整を不規則に行うに留まり、そのため刃部角はまちまちである。チャート製であるが、器面には節理が多い。

### スクレイパー（26~28）

26は不規則な剥離を行う石核から剥離された不定形な縦長の剥片を利用したものである。表面右側縁に刃部調整を行なっているが、不規則であるうえに刃部角がスクレイパーの刃部としては高すぎるため、実際に使用された可能性は低い。27はチャート質の礫を分割したのち、両縁に刃部を設定し調整を行なったものである。28は砂岩の礫面付近の剥片を利用している。表面右側部が刃部にあたるが、刃部が一定せず、使用には適さない。未製品の可能性も考えられる。



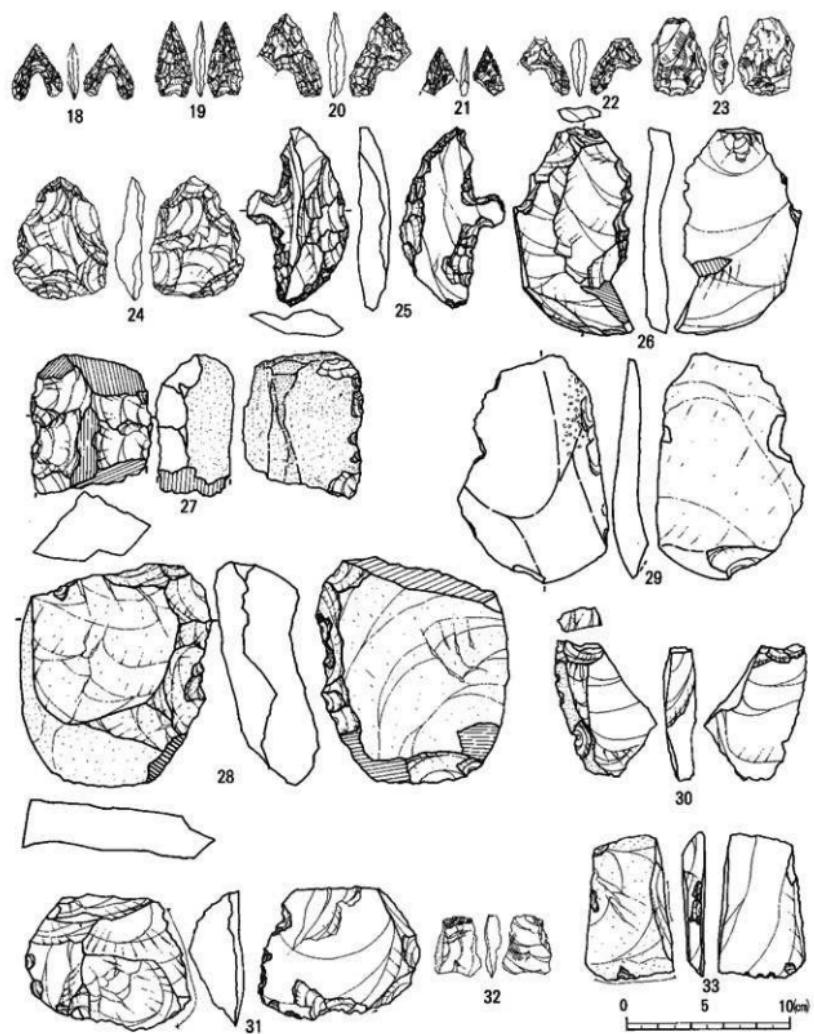
第7図 土器実測図

表1 出土土器観察表

胎土凡例：a（長石）b（角閃石）c（雲母）d（砂粒）e（白色粒）f（石英）

1（多量）2（中量）3（少量）4（微量）

番号	出土層位	部位	外 面	内 面	色 調	胎 土
1	IV層	口縁部～	横位の山形押型文→ 横位の撚糸文	入念な横ナデ→ 口縁部直下横位の山形押型文	2、5Y明黄褐 7/6	a-3, b-2, e-2
2	IV層	口縁部	横位の山形押型文	入念な横ナデ→ 口縁部直下横位の山形押型文	2、5Y明黄褐 7/6	a-3, b-2, e-2
3	IV層	胴部	横位～斜位の撚糸文	入念な横ナデ	2、5Y明黄褐 7/6	a-3, b-2, e-2
4	IV層	胴部	横位の山形押型文→ 横位～斜位の撚糸文	入念な横ナデ	2、5Y明黄褐 7/6	a-3, b-2, e-2
5	表探	胴部	横位の条痕文→突帯貼付→ 突帯周囲刺突	粗い継ナデ	5YR明赤褐 5/8	a-3, d-3, c-2, c-1
6	表探	胴部	突帯貼付→入念な横ナデ	横ナデ	5YR橙6/8	a-3, b-3, d-4, e-2
7	表探	胴部	横位の山形押型文	不明（剥落による）	7、5YR黄橙 7/8	a-2, b-3, e-2
8	表探	胴部	斜位の山形押型文	横ナデ	5YR橙7/8	a-1, b-3, d-4, e-3
9	表探	胴部	貝殻腹縁による横位の押引文	横ナデ	7、5YR橙6/8	a-3, b-3, d-4, e-2
10	表探	胴部	貝殻復縁による連続刺突	継ナデ	5YR赤褐4/8	a-3, b-4, d-4, e-3
11	表探	胴部	斜位の2段撚糸文→横ナデ	不明	5YR橙6/8	a-3, b-4, e-3
12	表探	胴部	横位の突帯貼付→ 突帯上刻目～斜位の撚糸文	継ナデ	7、5YR明褐 5/6	a-3, c-2, f-2
13	IV層	胴部	斜位の条痕文	入念なナデ	2、5Y浅黄	a-1, b-2, e-3
14	IV層	胴部	斜位の条痕文	ナデ	10YR黄橙8/8	a-2, b-3,
15	表探	胴部	斜位の条痕文	入念なナデ	7、5YR浅黄橙 8/6	a-2, b-3, c-4,
16	IV層	胴部	斜位の条痕文	入念な斜方向ナデ	10YR黄橙8/6	a-2, b-2,
17	IV層	胴部	撚位の条痕文→貝殻腹縁刺突	不明（剥落による）	10YR黄橙8/6	a-2, b-3, e-3



第8図 石器実測図

### 石斧（29）

硬質頁岩に成形のために大まかな剥離を行なったのちに、全面を研磨し仕上げた石斧である。観察すると、部分的に敲打による成形も行なった痕跡が認められる。また、この石斧は裏面に大きな剥離痕が遺される。おそらく使用中に欠損したものと考えられるが、欠損後に磨きによる調整が行なわれており、再度利用されたものと思われる。

### 二次加工剥片（30～32）

30は連続的な綫長剥片剥離技術による剥片の頭部に小規模な調整を加えたものである。31は不定形な剥片の周縁に加工を行なっている。表面右側部の刃こぼれ状の剥離は使用痕であり、スクレイパーとして利用された可能性が高い。32は不底形な剥片の一部に二次加工を行なっている。おそらく石鎚製作を意図したものであろう。

### 使用痕剥片（33、34）

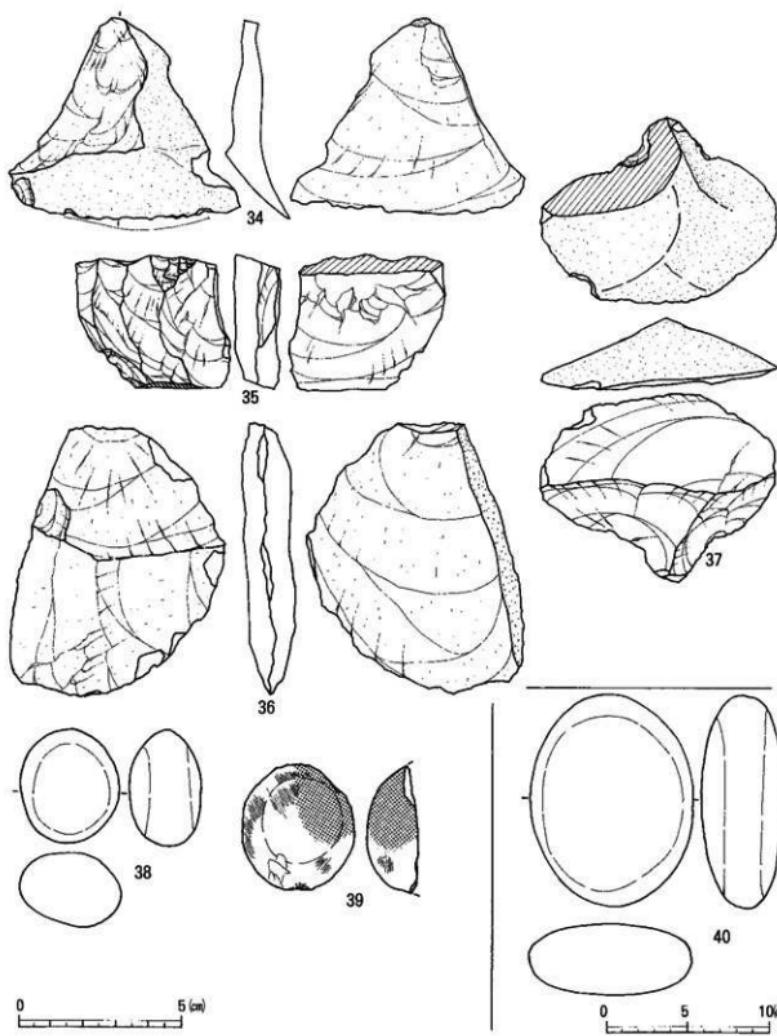
33は流紋岩製であり、表面の右側縁と下縁部に小規模の剥離痕が認められる。34は下縁部におよびたらしい数の剥離痕が遺される。下端部の断面が鋭利であることから、ここを刃部として頻繁に使用されたものと考えられる。

### 剥片（35～37）

35は節理面を打面として連続的に剥片を剥離した際に作出された剥片である。36は不定形な剥片である。表面左側縁は自然面である。欠損は周縁に遺されるが、使用痕等は認められない。37は疊面除去の際に剥離されたものである。そのため、表面の大部分は疊面で占められる。

### 磨石（38～40）

38は砂岩を用いた小形の磨石である。39は硬質頁岩の小疊を用いたものであるが、部分的に擦痕が遺される。また、スクリーントーン部は研磨痕により光沢の認められる部分である。40は細粒砂岩の扁平な円疊を利用したものであり、全面を使用したためか研磨痕が顕著に認められる。



第9図 石器実測図

出土石器観察表

番号	器種	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
18	石 錐	IV層	1.7	1.5	0.45	1	チャート	
19	石 錐	IV層	2.3	2.1	0.35	2.5	チャート	
20	石 錐	表採	2.6	1.9	0.55	6	チャート	脚部欠損
21	石 錐	IV層	1.5	1.0	0.25	0.5	黒耀石	尖端部のみ
22	石 錐	表採	1.8	1.5	0.5	2	頁岩	尖端部・脚部欠損
23	石 錐	表採	2.4	2.7	0.8	3	黒耀石	未製品
24	尖頭状石器	表採	3.8	2.9	0.9	10	チャート	石錐の未製品か
25	石 匙	表採	3.2	5.6	1.0	15	チャート	
26	スクレイバー	表採	6.4	3.9	0.9	20	流紋岩	
27	スクレイバー	表採	4.5	3.8	2.4	40	チャート	
28	スクレイバー	表採	6.8	5.9	3.2	110	砂岩	
29	石 斧	表採	7.0	4.6	1.2	40	硬質砂岩	欠損後再利用
30	二次加工剥片	表採	4.2	3.1	0.9	14	流紋岩	
31	二次加工剥片	表採	4.1	4.9	1.8	29	流紋岩	
32	二次加工剥片	IV層	1.9	1.5	0.5	2	黒耀石	
33	使用痕剥片	表採	4.4	2.6	0.7	19	硬質頁岩	
34	使用痕剥片	表採	6.2	7.1	1.9	45	砂岩	
35	剥 片	表採	4.2	4.8	1.4	34	チャート	
36	剥 片	表採	8.4	6.7	1.7	100	砂岩	
37	剥 片	表採	5.8	7.3	2.2	60	斑晶流紋岩	
38	磨 石	表採	3.4	3.0	2.2	33	砂岩	
39	磨 石	IV層	3.9	3.4	1.6	20	硬質頁岩	擦痕あり
40	磨 石	表採	6.0	4.9	2.5	880	細粒砂岩	

### 第三章 まとめ

当遺跡は、削平により一部を消失していたばかりでなく、南側の丘陵地からの傾斜のために、立地環境が良好とは言えず、それを反映して検出遺構・出土遺物の量もさほど多くはなかった。しかし、当調査では、その数少ない遺構中より重要な遺物が出土している。

S P - 0 1 より出土した土器は、口縁直下を横位の山形押型文を施文した後、その下位に L → R の撚糸文をやはり横位に施文したものである。また、内面口縁部直下にも山形押型文を横走させる。器形はほぼ円筒状になり、器壁は厚い。

九州内においてこれまで確認された縄文早期の押型文・撚糸文の文様併用土器としては、熊本県大津町の中後追遺跡、同瀬田裏遺跡、大津町～旭町の無田原遺跡が挙げられる<sup>11)</sup>。殊に無田原遺跡においては、多くのバリエーションをもつ文様併用土器が出土している。木崎康弘氏は、こうした土器の出現する背景を円筒条痕文系土器と押型文土器の相間に求め、このうちの条痕文が撚糸文として置換されたと結論付けている。これは、遺跡の立地する熊本県北部が双方の様式の流入する地点であることを想定した上で考察されており、簡潔に述べられている。しかし、隣県におけるこうした成果を、即当遺跡出土の土器と関連付けることはできない。なぜなら、無田原遺跡出土の土器を詳細に観察すると、双方の文様は重ねて施文されるか、表裏で文様を転換させる形で併用しており、当遺跡の例のように同一面において文様帯が明確に分割されているものはない。また、撚糸文は殆どが深く施文され、ごく浅く付けられる当遺跡の資料とは異なっている。更に、押型文土器の汎九州的な流れから考えると、無田原の例は山形押型文の原体のモチーフや施文パターンが当出土例よりもやや後出するようである<sup>12)</sup>。

宮崎県内ではこのような組み合わせの文様併用土器はこれまで確認例がない。しかし、条痕文と山形押型文の併用土器は、芳ヶ迫第1遺跡において出土例が一例のみ報告されている。これは、口縁部直下に横位の条痕文が施文され、その下位に横位の山形押型文が施文されるもので、両者の文様帯は明確に分割される。器形は円筒形を呈し、器壁は著しく厚い。木崎氏の意見に従えば、円筒条痕文系土器と押型文土器が相関する際、条痕文が撚糸文に置換されずそのまま施文されたものと言える。田野町でこれまで調査された縄文時代早期の遺跡の殆どで押型文土器が出土しており、また円筒条痕文系土器は押型文土器以上に多量に出土していることを考えると、押型文土器の在地化、相関化の中で、こうした土器が発生した可能性は十分である。

上記の過程をふまえて、再び S P - 0 1 出土の土器について説明を加えたい。宮崎県央部の縄文早期の遺跡において、撚糸文が施文された土器は壺形土器を除くとごく少量のみである。これは同じ外からの土器でも、町内をはじめ県央部の遺跡で多く出土する中原式土器や押型文土器とは大きく異なっており、外来の土器というだけでなく撚糸による施文という手法が、この時期では特殊なものとして考えられていたことが推測される。それが一つの文様描出方法として受容される段階で、これも元は外来の施文手法であった押型文土器と共に施文されたのではないだろうか。僅か1例のみの確認であるため、当遺跡の例を一般化することには無理が伴うが<sup>13)</sup>、いずれに

せよ、この土器が特殊なものであったことは、遺物分布の希薄なこの地点に一括して埋納されていたことからも窺い知ることができる。なお、遺構周辺からは、条痕文系の土器が多く出土しているが、その全てが一般に南九州で確認例の多い器壁の厚い貝殻条痕文土器ではなく、器壁の薄い、条痕が浅く施文された土器であることも興味深い。

#### 参考文献)

- 「無田原遺跡」『熊本県文化財調査報告第148集』熊本県教育委員会 1995  
「蒲生・上の原遺跡」『熊本県文化財調査報告第158集』 熊本県教育委員会 1996  
「八重地区遺跡」『田野町文化財調査報告書第19集』 田野町教育委員会 1994  
「永迫第2遺跡」『田野町文化財調査報告書第21集』 田野町教育委員会 1996  
「庵毛第3遺跡」『田野町文化財調査報告書第28集』 田野町教育委員会 1998  
「芳ヶ迫第1遺跡 芳ヶ迫第2遺跡 芳ヶ迫第3遺跡 札ノ元遺跡」  
『田野町文化財調査報告書第3集』 田野町教育委員会 昭和61年

#### 註(1)

他に、桑畠氏より鹿児島県石峰遺跡出土の土器にも類似の資料が存在するというご指摘を頂いたが、筆者は実見していないため、検討は控えたい。

#### 註(2)

もちろん、文様の変遷には地域的なズレも考えられるため、こうした要素が先後関係に直結すると断言することはできない。

#### 註(3)

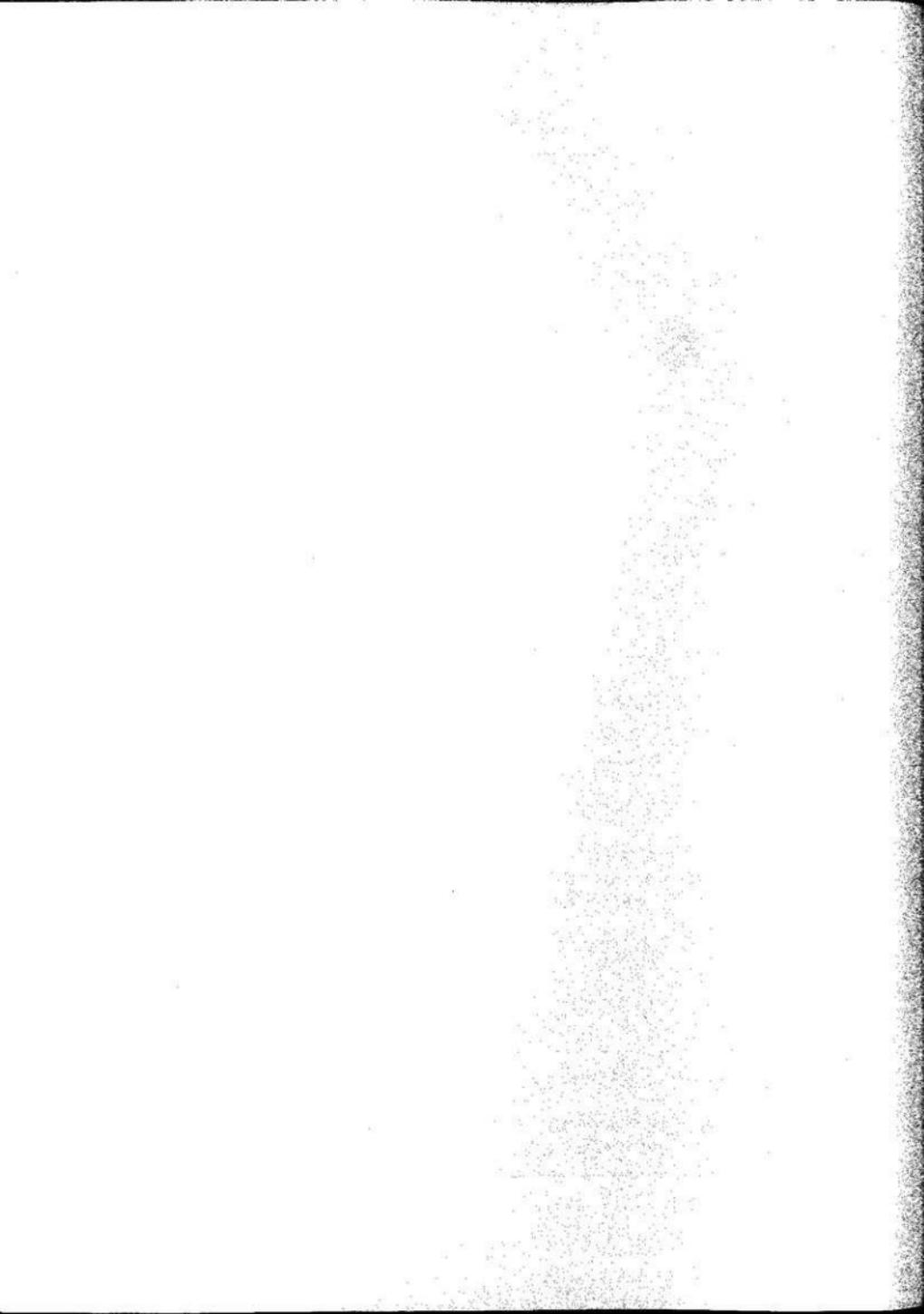
今後の類例に期待したい。なお、こうした文様併用土器のなかでも、今回のように文様帯が区分された土器の場合は、文様の交錯部でなければそれと認識されないという点についても考慮する必要があろう。

## 報告書抄録

ふりがな	ずくのやまだい 2いせきちく		
書名	ズクノ山第2遺跡D地区		
副書名	県営ふるさと農道緊急整備事業鹿村野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
卷次			
シリーズ名	田野町文化財調査報告書		
シリーズ番号	第29集		
編集者名	田野町教育委員会 文化財調査事務所 金丸武司		
編集機関	田野町教育委員会		
所在地	宮崎県宮崎郡田野町甲2818番地		
発行年月日	1999年(平成11年)3月		
ふりがな	ずくのやまだい 2いせきちく		
所収遺跡名	ズクノ山第2遺跡D地区		
ふりがな	みやざきけんみやざきぐんのちょうおつずくのやま		
遺跡所在地	宮崎県宮崎郡田野町乙ズクノ山13308-1		
市町村コード	遺跡番号	北緯	東經
調査期間	平成10年5月17日～7月7日		
調査面積	630m <sup>2</sup>		
調査原因	県営ふるさと農道緊急整備事業鹿村野地区		
主な時代	縄文時代早期	主な遺構	土坑、ピット
主な遺物	押型文土器、貝殻文円筒土器、条痕文土器、押型文・撲糸文併用土器 石鏃、尖頭状石器、石匙、スクレイバー、石斧、剥片類、磨石		

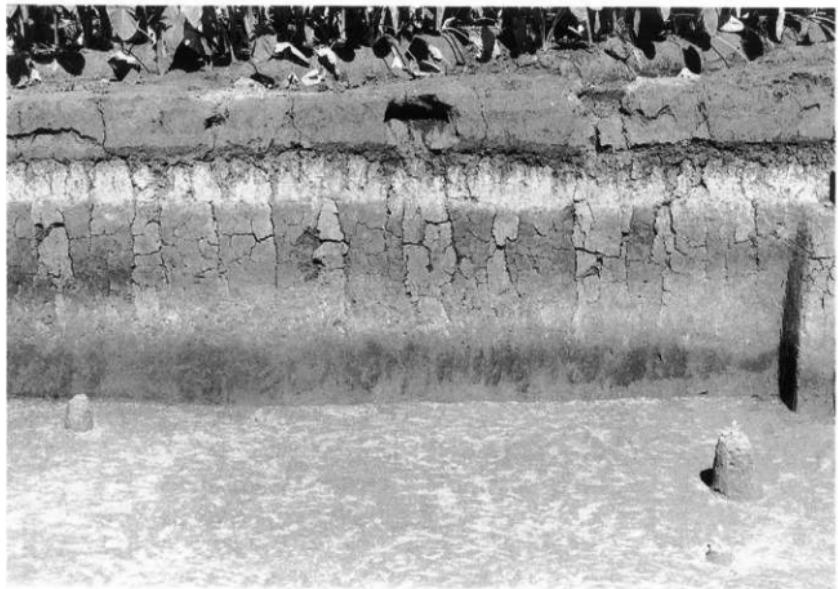
# 写 真 図 版

(スグノ山第2遺跡D地区)





図版1 調査状況（北から）



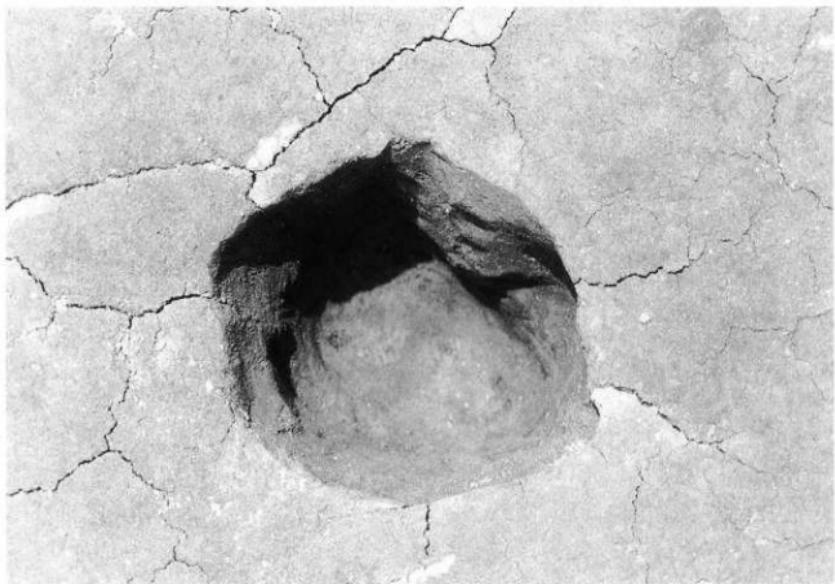
図版2 土層断面（東から）



図版3 SC-1 検出状況



図版4 SC-2 検出状況

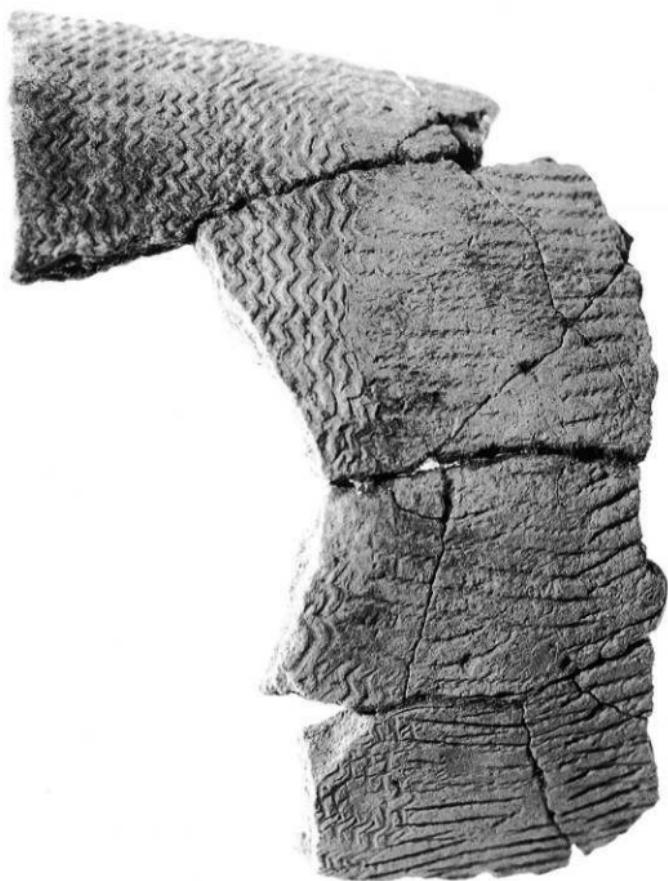


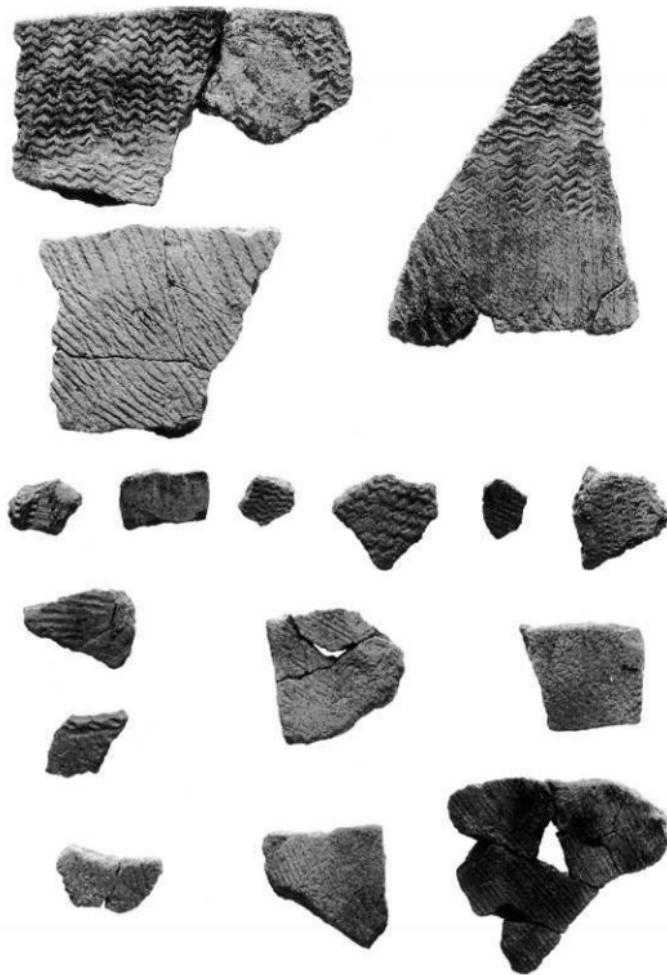
図版 5 SC-3 検出状況



図版 6 SP-1 検出状況

図版7 出土土器(その1)





図版8 出土土器(その2)



図版9 出土土器